

資格検定室NEWS

将来の自分の立ち位置を見据えるためのNEWSLETTER



学ぶ者としての学業への取り組み

新入生を迎えて、本校にも新しい空気が流れている。それぞれの希望を胸に、初心を忘れずに頑張ってもらいたい。高校での生活は、勉強に加えて部活動や資格取得、ものづくりと自主性が求められる。

そのような時に、目に止まった新聞記事があったので抜粋して紹介する。

問われ始めた「学業軽視」

(朝日新聞 3月9日朝刊「縦横無尽」より)

2020年東京五輪でメダルを狙えるある選手について、その選手が通う大学の関係者がこぼしている。「学業への態度がひどい。欠席する授業も多く、レポート提出もしないことがあり、多くの先生が『単位を与えたくない』と話している。まじめに努力すれば卒業できるのに、授業をなめきって競技以外はしようとしなない」

スポーツ推薦の大学生の学力不足や学業軽視は今に始まった問題ではない。「本来、一定の出席率がないと、試験を受ける資格すらない。近年は『ルールを守るべきだ』という声が出るようになり、厳しい姿勢で臨む教員も出てきた。各部でもしっかり指導しないとイケない問題だ」

トップアスリートが在籍する各大学では、遠征が多い場合の特別授業をはじめ、学業との両立を保証する優遇措置は敷いている。しかし、「自分はスポーツだけをするために大学に来ている」と信じている学生がいるのも事実だ。

なぜ、競技偏重ではダメなのか。学業第一の建前もさることながら、授業にも来ず、来ても寝ていて、課題も出さない姿を目にすれば、「応援したいという気になれない」となる。

このままでは、大学がスポーツで名を上げるために学生を「雇っている」と揶揄（やゆ）されても仕方ない。各大学が一般学生にそっぽを向かれている状況をたださないと、大学スポーツのマーケティング活性化にも悪影響を与えるだろう。

高校は大学と違って、授業をサボって部活動のみをすることはできないし、単位を取らずに進級することもできない。しかし、高校生の本分は「勉強」を忘れてはならない。高校は職業訓練所でもなくスポーツクラブでもない。